

就労移行者の現状把握からみえてきたもの

○藤本扶美子 1) 植木達也 2) 矢萩嘉子 3) 加納美幸 3) 神廣憲紀 4) 齊藤一郎 4)

心理士 1) 作業療法士 2) 看護師 3) 医師 4)

医療法人耕仁会 札幌太田病院 2階デイケア課

1. はじめに

当デイケアでは長期目標を就労としているメンバーが全体の5割を占めているが、就労移行につながるケースは2割程度である。そこで就労移行者の現状を把握することで、今後の就労支援に役立てることが出来ないかと考え、過去3年間の就労移行者について就労形態別にデータ分析を行った。その結果を報告する。

2. 調査期間および対象

2017年4月～2020年3月までの過去3年間、2階デイケアを利用し就労移行につながった55名(内デイケア併用者22名含む)を対象に就労形態別に疾患の割合、移行先の割合、利用期間、プログラムの参加率、他機関利用状況について検討を行った。

3. 結果

表1. 疾患の割合(単位：人)

	一般就労	就労継続支援A型	就労継続支援B型	計
統合失調症	2	3	20	25
気分障害	8	6	5	19
その他	5	1	5	11
計	15	10	30	55

表2. 利用期間(単位：人)

	一般就労	就労継続支援A型	就労継続支援B型	計
1年未満	8	3	6	17
1～2年	2	2	6	10
2～3年	1	2	3	6
3～4年	1	1	3	5
4～5年	1	0	2	3
5年以上	2	2	10	14

表3. プログラム参加(単位：人)

	一般就労	就労継続支援A型	就労継続支援B型	計
疾病教育	5	1	2	8
対人技能	5	7	12	24
就労プログラム	4	7	11	22
趣味活動	11	7	23	41
運動	11	6	14	31

表4. 他機関の利用(単位:人)

	一般就労	就労継続支援A型	就労継続支援B型	計
連携モデル事業	0	5		5
相談室	0	1	3	4

雇用形態別の特徴

一般就労:

気分障害が多く、2年以内の移行者が10名(7割)を占めている。内休職者は5名おり、皆半年ほどで復職に至っており利用期間は短い。また統合失調症をみると、2名共に休職者であった。一般就労移行者の多くは、発病等により一時的に離職している場合が多く、就労スキルの高さからスキル習得への関心は低く、趣味活動や運動を中心に活動される傾向がみられた。

就労継続支援A型事業所:

半数は気分障害であり、3年以内の移行が7名(7割)を占めている。プログラム参加率は高く、様々な活動への関心がみられた。また連携モデル事業の参加や相談室を活用しながら移行に結びつくケースが多くみられた。中でも統合失調症の3名は、2名が共同作業所やB型作業所をデイケアと併用しながら通所し、連携事業や相談室を活用していた。また残りの1名も自宅で取り組める内職業を行いながら移行を果たしていたことから、A型移行を果たした統合失調症者は段階を踏みながらスキルアップを果たし移行に至った経過がみられた。

就労継続支援B型事業所:

就労移行者の半数がB型事業所に移行しており、20名(7割)が統合失調症である。利用期間にばらつきはあるが、2年以内12名また5年以上10名と2極化している傾向がみられた。5年以上の者は全員が移行後のフォローアップとしてデイケアを利用しており、就労の継続につながっている。

4. 考察

一般・A型は気分障害、B型は統合失調症と雇用形態で移行しやすい疾患があること、また多くの移行者が2年以内に就労につながっていることから、疾病特性をよく理解し、適当な時期に背中を押す事で、スムーズな移行につながるのではないかとと思われる。プログラムでは疾病教育の参加の低さが目立ったが、症状の安定から必要性の関心度が低くなったと思われ、症状の安定は就労移行の基本となる事を再認した。各人の課題に合わせた疾病教育の提供を心掛け工夫を重ねていきたい。またA型移行者の経過から他機関との連携の効果を感じたが、現在利用者は非常に少ないため、他機関との積極的な連携は今後の課題であると感じた。今回得た情報を活かしながら、今後の就労支援に役立てていきたい。

【参考文献】

- 1) 上ノ山眞佐子 2016 新・精神科デイケア Q&A 126-131 中央法規出版.

2020年6月
第22回 思春期の心の講演会、相談会
研究発表③

2) 古屋龍太、近田真由美編 2018 精神医療 89号 批評社.